

第7回

ROBO-ONE フレイバック・レポート

前号でも速報をお伝えした、第7回ROBO-ONE(2005年3月19~20日開催、会場:お台場/日本科学未来館)。エントリー数169機という、史上最大規模の“二足歩行ロボット格闘大会”となった今大会を、あらためてプレイバック。詳細にレポートしよう。

あさ
梓 みきお



エントリー数は1.5倍!

今回で丸4年目に入った『ROBO-ONE』二足歩行ロボットによる格闘大会として、ロボコン好きだけでなく、一般的な「ロボット好き」の間でも知られる大会となりつつある。

特に今回は、大会直前まで放映されていた日本テレビ系列『ワールド レコーズ(現在は終了)』での“ロボットバトル世界一決定戦”の影響が大きかったようだ。同番組でバトルしたロボットはROBO-ONEでもおなじみの参加者たちの手によるもの。それに触発された人が増えたのか、エントリー数が前回比1.5倍近くの169機に増加。また、観客も増えたようだったが、何より違ったのは子供たちの増加と、ロボットに対する「キャラクターとしての応援」が生まれていたこと。子供たちが口々に「メタちゃん」「しらぬい」と声を上げる姿は、これまでのROBO-ONEにはない、新鮮なものだった(写真1)。



写真1

今回のルール変更

回を追うごとにルールが厳しくなるのが特徴のROBO-ONEだが、今回の大きなルール変更は「足裏のサイズ規格」だ(図1)。



図1 (画像提供: ROBO-ONE委員会)

前回までは足裏の「対角線の長さ」で規定されていたので、極端な話を言えば丸い足裏を付けることが可能だった。しかし、今回からは「前後の長さ: (足の長さの)60%」と「左右の長さ: (同)40%」というように別々に規定されたため、幅の広い足を付けることが不可能になったのだ。また、あわせて最大長さも「15cm」と5cm短くなり、大きなロボットの製作はさらに厳しくなった(たぶん、ASIMOはもう出られないと思う)。

試合進行面でも大きな変更があった。

決勝トーナメントは1回戦から決勝まで、すべて「3分1ラウンド、3ノックダウン制、延長あり」というシステムになり、それともなって、ダウン後の起き上がり動作でリングアウトした場合はダウン数に入れないうことになった。

そして、試合途中でも、1ダウンと引き換えに2分間の整備時間を取ることができる「タイム」が導入され、スイッチの入れ忘れて闘わずしてアウト、のような場面を回避できるようになった。

“違い”を強調する 予選演技が必要!

「格闘大会」であるROBO-ONEだが、予選は各ロボットが1機ずつリングに上がり、機体の動きや機能をアピールする形式である。時間は2分。短い時間の中で規定演技(今回も本の上り下り)を含め、いかに「高性能」で「エンターテインメント性」に優れているかをプロデュースしなければならない。

そこでポイントとなるのが「参加資格審査」である。参加ロボットは、予選前に行われるこの審査で

- 10秒以内に5歩以上歩く
- 屈伸
- 横歩き
- 起き上がり

という動きをすべてクリアしなければ予選に出られない。ということは、逆に考えれば、予選の土俵で普通に歩いたり、普通に起き上がっても、審査員にとっては当たり前の動きということだ。

もちろん「他のロボットより明らかに早く歩ける」とか、「足をクロスして横歩き」とか、「跳ねて起き上がる」なんてことが